

言語地図を読み直す

大西拓一郎

1. はじめに

日本の方言学にはデータの蓄積があり、その活用が研究を展開させた実績がある。『日本方言大辞典』はその好例である。日本では古くから多くの方言集が刊行されてきた。それを集大成することでこの大辞典はできた。

一方、公表されているデータはすべてが活用されているわけではない。もっとも、活用されていないからといって、データに価値がないということではない。ただ、そのままになっているだけということは少なくない。

諸般の事情¹でフィールドに出られないというような状況は、このようなデータに目を向けるのに良い機会かもしれない²。

2. 言語地図とその研究

国立国語研究所編（1966-1974）『日本言語地図』と柴田武（1969）『言語地理学の方法』の刊行を機に 1970 年代以降、日本では大量の言語地図が刊行されてきた。21 世紀初頭までに言語地図集が 440 冊以上、そこに収録される言語地図は 28,000 枚にのぼる。これは世界の方言学の中でもトップレベルである（Onishi2010,2018）。これらの目録や一部の地図画像は、後述する国立国語研究所「言語地図データベース」を通して確認ができる。

これだけ多くの言語地図が公表されているが、すべてが研究に活用されているわけではなく、分析の対象になっているのは一部にとどまる。これまでに産出された言語地理学関係の論文は 1,000 本程度あり、その数は他分野と比べて少ないわけではない（むしろ多いと考えられる）が、言語地図の枚数からすれば、利用の余地は十分残されているはずだ。

3. 馬瀬良雄の「言語地理学」

柴田武による『言語地理学の方法』についてはすでに触れたが、同じ年（1969 年）に馬瀬良雄が『国文学 解釈と鑑賞』34 巻 8 号（臨増：方言研究のすべて）に「言語地理学—歴史・学説・調査法—」を公表している。この号は、同じ至文堂からそのまま単行本化されているから売れ行きもよかったのだろう。その点からしても、馬瀬による「言語地理学」の影響も大きかったのではないかと考えられる。

『言語地理学の方法』は、ややことばが過ぎることを承知の上で記すなら、『蝸牛考』（柳田国男 1930）を通して言わば柳田の名人芸の上で成立していた方言圏論を言語地理学として、実践的な経験科学に昇華させた。それゆえ、多くの研究者をひきつけ、大量の言語地図を生み出すことになった。

¹ ここでは新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大を念頭に置いているが、それに限らずさまざまな支障が起こりえるだろう。

² 本稿に記すのは筆者の実践に基づくが、必ずしも COVID-19 の拡大を機とするものではなく、たまたま時期が重なったということであった。

一方、馬瀬の「言語地理学」は、先行するヨーロッパの言語地理学を基盤としながら、同音衝突、民間語源、混交といった言語変化の基本に根ざしつつ、長野県の方言分布を中心にした具体例をもとに言語地理学の解説を行う。単行本と論文という点で分量の差はあるが、こちらを参考に道を選んだ研究者も多かったことだろう。

4. 同音衝突

同音衝突は言語変化の進行において、同音となってしまう事項の存在（同音異義語の発生）のために変化の進行が阻まれる現象である。同音衝突の回避と呼ぶ方がわかりやすいかもしれないが、術語として固定化しており「同音衝突」と呼ばれる³。

ほとんどのケースでは2語の同音衝突である。フランス語における「雄鶏」と「猫」の事例が早くから紹介されており（ドーザ 1938：72-74；1958：81-84）、そこでも触れられている「釘」と「鍵」については後年、ジリエロン（1994-1995）としても紹介された。日本語においては、小林好日（1950：133-137）の「母」と「唾」が地図による実証を行った最初の研究であり、馬瀬良雄（1969、1979）の「もんぺ」と「わらの長靴」や小林隆（1981）の「とうもろこし」と「もろこし」、「酸葉」と「音のしない屁」などがよく知られる。

5. 神主と虫

同音衝突として知られる事例の多くが2語の対立である。その中にあって、馬瀬良雄（1969）が取り上げる長野県における「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった」は3語の対立であり、注目される。この事例について馬瀬良雄（1969：207）は、次のように述べている。

今、以上のカマキリ・オンブバッタ・アメンボの三枚の地図の ne:sama 類、tajo:sama 類及び okannufi 類の分布を重ね合わせると、驚くことに、上伊那全域が過不足なく、この三種類の方言で覆われ、二～三の地点を除いて二つ以上の虫を同じ名称で共有することはない。

さて、「神主」をこの地方でどう呼ぶか。これを地図にしてみると、息をのむほどカマキリ以下の3枚の地図を重ねた地図と似ている。

これらの語形はいずれも「神主」を表す語形に由来する⁴もので、「神主」の方言形をもとに「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった」が区別され、同音衝突が回避されていることになる。そして、その分布を「驚くことに」「息をのむほど」と表現されている。ところが、原論文にもこの論文の再録（馬瀬良雄 1992：13-53）にもそれを表す地図がない⁵。

³ したがって、同音衝突しないで（同音衝突が回避され）言語地図上では相補分布の状態を示すのが同音衝突ということになり、複数語に同音が共存する状態（言語地図上では複数の項目で分布が重なっている状態）は同音衝突ではないことになる。

⁴ これらの虫の細長い頭部と烏帽子を被った神主の姿の類似性による連想と考えられる。

⁵ ただし、次節で示すように馬瀬良雄（1980a：382）の図 11.133 ならびに馬瀬良雄（1980b）の図 6「神主の方言形は何の虫を表わすか」により把握は可能である。

「言語地理学」の馬瀬先生がそこまで表現するのであれば、その分布を見てみたいではないか。「驚くことに」「息をのむほど」の分布とはどのようなものなのか。そして、それをとらえるにはどのようにすればよいだろうか。

6. 地図での検証に向けて

第2節で述べたように日本では多くの言語地図が刊行され、その成果は国立国語研究所のサイト「言語地図データベース」で確認できる⁶。

国立国語研究所 言語地図データベース

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb_index.html

第5節で述べた長野県の方言分布は、天竜川上流部から中流部の流域にあたる上伊那地方と下伊那地方ならびに諏訪地方を対象とした馬瀬良雄（1980a）『上伊那の方言』で扱われており、上記の言語地図データベースで地図画像も見ることができる。

馬瀬良雄『上伊那の方言』

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/201/201_index.html

この中にある当該の「神主」「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった」ならびに関連する「しょうりょうばった」そして「神主の方言形は何の虫を表すか」の各図のページから地図が見られる。

『上伊那の方言』図 11.53「神主」

<https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/201/9173/9173.html>

『上伊那の方言』図 11.128「かまきり」

<https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/201/8580/8580.html>

『上伊那の方言』図 11.130「あめんぼ」

<https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/201/1645/1645.html>

『上伊那の方言』図 11.131「おんぶばった」

<https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/201/5918/5918.html>

『上伊那の方言』図 11.132「しょうりょうばった」

<https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/201/14543/14543.html>

『上伊那の方言』図 11.133「神主の方言形は何の虫を表すか」

<https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/201/9178/9178.html>

言語地図データベースでは、それぞれの地図を2種類の画像ファイルにしている。「ジオタグなし」と記されている方は、元の地図を忠実にスキャンした画像ファイルである。初期の言語地図集を中心に紙の劣化が進行しており、それらの保存・保護も目的とするため、高い解像度（800dpi）のTIFF形式で公開している。ファイルサイズの関係でダウン

⁶ 国立国語研究所の言語地図データベースについては、2020年度国立国語研究所オープンキャンパスで紹介した動画をYouTubeで配信している。

<https://www.youtube.com/watch?v=d0lk89U9Las&feature=youtu.be>

ロード・展開・閲覧と多少の手間を要するが、理解していただきたい。一方、「ジオタグあり」は地図に位置情報を付与した TIFF 形式の画像ファイルである。こちらもダウンロードして、普通に閲覧できるが、地図によってはやや横に広がって見えるかもしれない。

「ジオタグあり」は位置情報を持っているので、地理情報システム（GIS）で展開すると正しい位置に表示することができる。そのことで、市町村境界（行政界）や河川、道路、標高などの地理情報と重ね合わせて照合することができる。また、後述するように地図画像から新たに分布データを構築することも可能になる。

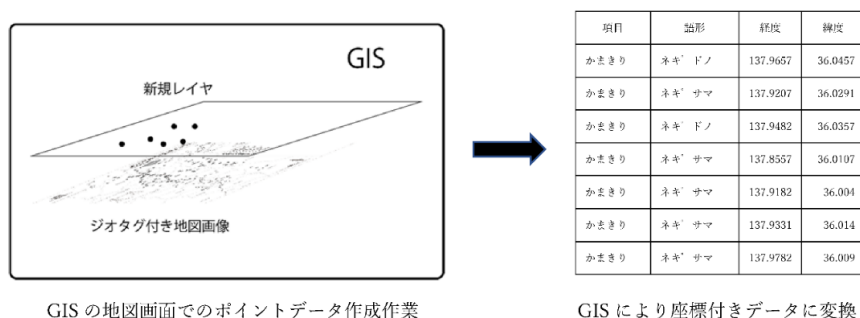
さて、上記の地図画像から「驚くことに」「息をのむほど」の分布を見ることはできただろうか。一枚ずつの地図からはわからないはずであり、複数の地図を較べる必要がある。しかし、並べて閲覧しても難しいのではないだろうか。「神主の方言形は何の虫を表すか」は複数の地図の情報を総合化しているが、情報が過多になっているきらいがあり、注目点が絞りづらい。

7. GIS データ化

GIS にジオタグ付き地図画像ファイルを読み込み、これをもとに分布データを新たに作れば、それを使って地図の再描画ができる。

GIS ソフト⁷により多少の違いはあるが、基本手順は同じはずだ（図 1）。まず、ジオタグ付き地図画像ファイルを読み込む。新しいレイヤを用意し、地図画像ファイルに重ね合わせる。下に見えている地図画像をもとにして、新しいレイヤに各語形の分布地点（記号が置かれている場所）にポイント（点データ）を作成する。語形ごとにレイヤを分けて複数作成するなど、方法はいくつかあるだろう。

GIS は、作成した地図ファイルを経度・緯度の座標による位置と語形など言語情報の属性の対応表（地理行列）に変換して書き出すことができるので、そのような表に出力して整備しておく、複数の語形をまとめるといった分析を行う際に便利である。経験的には、始めの段階では細かめに分類して扱っておく方がよい。細かいものをまとめるのは後でいくらかでもできるが、最初にまとめてしまうと、後で再分類が必要になることが少なからず発生し、結局は手間が増えがちだからである。つまりは、急がば回れということだ。



【図 1】 GIS を用いた方言分布データ作成作業

⁷ ArcGIS や SIS など、市販のソフトは高価であるが、学生向けディスカウントが用意されている。MANDARA や QGIS のように充実した機能を持つフリーソフトもある。

このように地図画像をもとに新たにデータを作成するにあたっては、マウスを用いて、地点にカーソルをあてがい、クリックすることが必要となる。これも経験から言うと、ブルートゥースを含め無線のマウスでは、通信のタイミングのせいではないかと思われるが、微妙な位置のずれが生じてしまうことがあり、有線（パソコン本体とマウスが USB などを通じてコードでつながっている状態）の方が、ストレスを減らせることが多い。

その点で、費用はかさむが、液晶ペンタブレットがあると、格段に効率が上がる。液晶ペンタブレットの画面に GIS の地図画像を映し出し、その上で直接スタイラスペンを用いて、ポイント（点データ）の作成を進められる（該当する場所をスタイラスペンで突くようなイメージ）からだ。方式により使い勝手や精度に差があると思われるが、タッチパネル式のディスプレイもある程度有効だろう。

今回の作業の場合は、各地図上のすべてのデータを対象にする必要はない。ネーサマ類・タヨーサマ類・オカンヌシ類が当面の対象であるから、これらに絞り込んで作業すればよい。ただし、さらにもっと踏み込んで研究を進める可能性もあるかもしれない（実際、そのように最初の見通しに止まらない方向に研究が展開することが少なくない）から、やりなら全面的にデータ化しておきたいというのであれば、その方針で臨むとよいだろう。このあたりは時間との兼ね合いであり、各自の判断に委ねられる。作業に要する時間は地点数や語形の量にもよるが、地図内の対象を絞り込んで作業すると一枚の地図に要する作業時間は数十分から 1 時間弱程度、全面的に行う場合は一枚あたり半日程度といったところだろう。

なお、地図集によっては調査地点の一覧表が収録されていることがある。その場合は、一覧表と地図を照合しながら、語形と地点の関係を表すデータを作成することも可能である。これは、もっとも着実な方法であるものの、同時にもっとも根気（根性）が試される作業である。

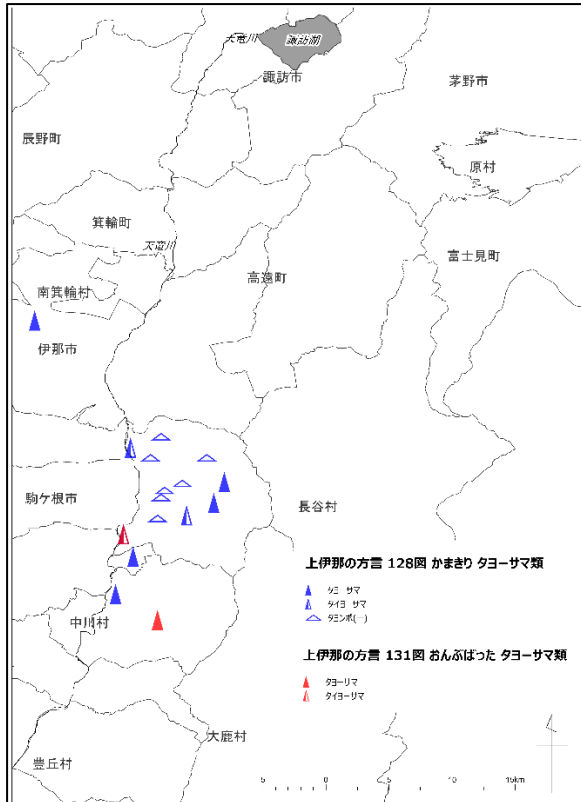
8. 再描画による検証

作成したデータ⁸を活用し、GIS で描き直してみた⁹。

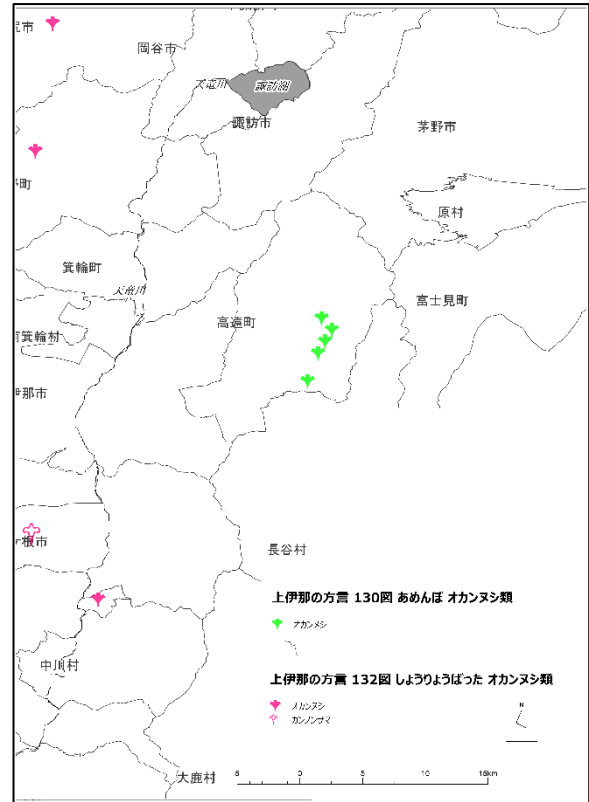
タヨーサマ類について図 2、オカンヌシ類について図 3 に示した。タヨーサマ（太夫様）類（図 2）は、「かまきり」と「おんぶばった」に現れるが、いずれも下伊那に近い南部にまとまった分布を示し、同音衝突とは考えにくい。オカンヌシ（御神主）類（図 3）は、「あめんぼ」と「しょうりょうばった」に現れる。「あめんぼ」では地図の中程の高遠町の長谷村との境界の近くに分布するのに対し、「しょうりょうばった」では地図の西の端の方にまばらに見えるだけで、互いに重なりがないのは確かであるにしても、一般にこのように大きく離れた分布状態を相補分布と呼ぶことはない。

⁸ 信州大学人文学部沢木幹栄研究室との共同研究（10 節参照）で作成したデータに修正を加えた。

⁹ GIS による地図描画など、言語地理学での GIS の利用方法は筆者のサイトでも提示している。



【図 2】 タヨーサマ（太夫様）類

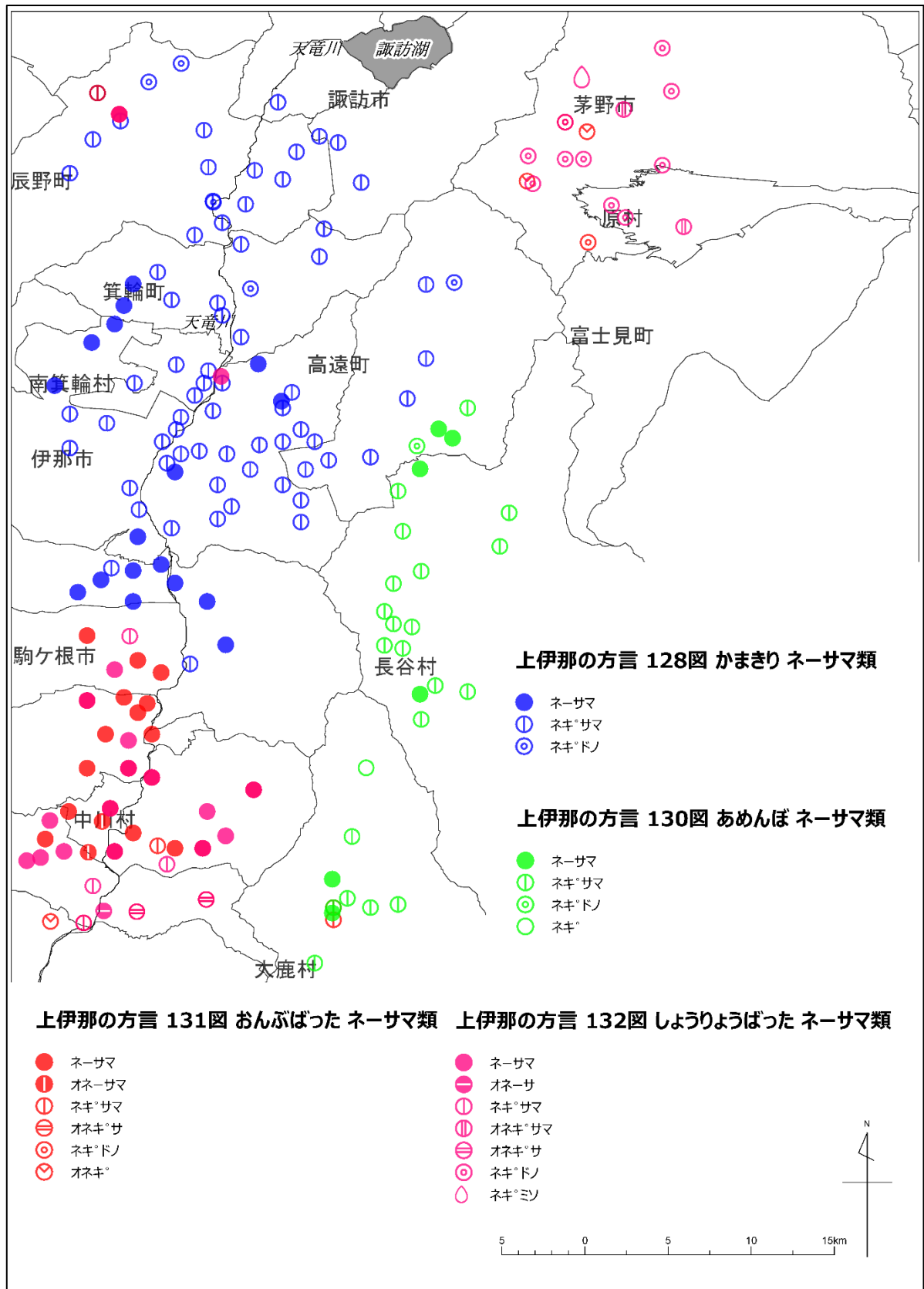


【図 3】 オカンヌシ（御神主）類

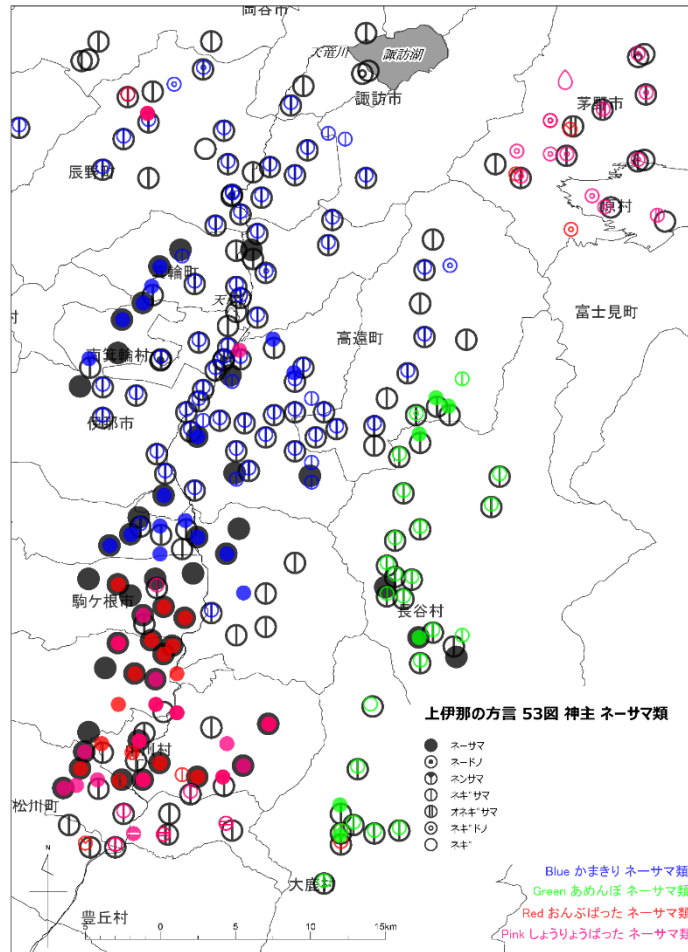
「禰宜様」をもとにするネーサマ類について示したのが、図 4 である。一見してわかるとおり、見事に全域が色分けされている。図の北西は「かまきり」のネーサマ類（青色）、中央あたりは「あめんぼ」のネーサマ類（緑色）、北東と北西には「おんぶばった」と「しょうりょうばった」のネーサマ類（赤色・紅色）によるコントラストが明確に現れている。おそらくこれこそが馬瀬先生が「驚くことに」と書き記された分布なのであろう。この図により、50 年を隔てた追体験がようやく可能になったわけである。

なお、馬瀬先生は「かまきり」「おんぶばった」「あめんぼ」を対象にして記述されているが、『上伊那の方言』のデータを活かすと「しょうりょうばった」も加えた方が明確である。というのも分布を見る限り、「おんぶばった」と「しょうりょうばった」は、そもそも区別が明確ではなく、両者のデータを統合した方が現実をよく反映していると考えられるからである。したがって、この図が示すのは、「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった・しょうりょうばった」の 3 語が示す同音衝突の相補分布ということになる。

虫の語形のネーサマ類は、「神主」の方言形のネーサマ類をもとにすることが前提であった。これを検証するため、「神主」のネーサマ類の分布と重ね合わせたのが図 5 である。馬瀬先生が「息をのむほど」と記されるように虫と「神主」の語形はほぼ一致しており、相互の明瞭な関係が確認される。ただし、例えば諏訪地方（図の北東部）の一部のように「神主」はネギで、虫はネギドノのように、「神主」に対しては名称（reference term）、虫に対しては呼称（address term）のような異なりが見られるところがある。虫を身近にする子どもたち（正確には話者たちの子ども時代）の感覚が現れているのかもしれない。



【図 4】 「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった・しょうりょうばった」のネーサマ類



【図 5】「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった・しょうりょうばった」と「神主」のネーサマ類

9. 地域との照合

「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった・しょうりょうばった」を表すネーサマ類は同音衝突として、空間的領域が明瞭に相補分布していることを見た。ところで、この相補分布を陰影段彩図(標高による色分けに太陽光による影を付与した、地図の立体的表現方法)で表した地形や河川・湖沼などと照合する(図 6)と興味深い事実が浮かび上がってくる。

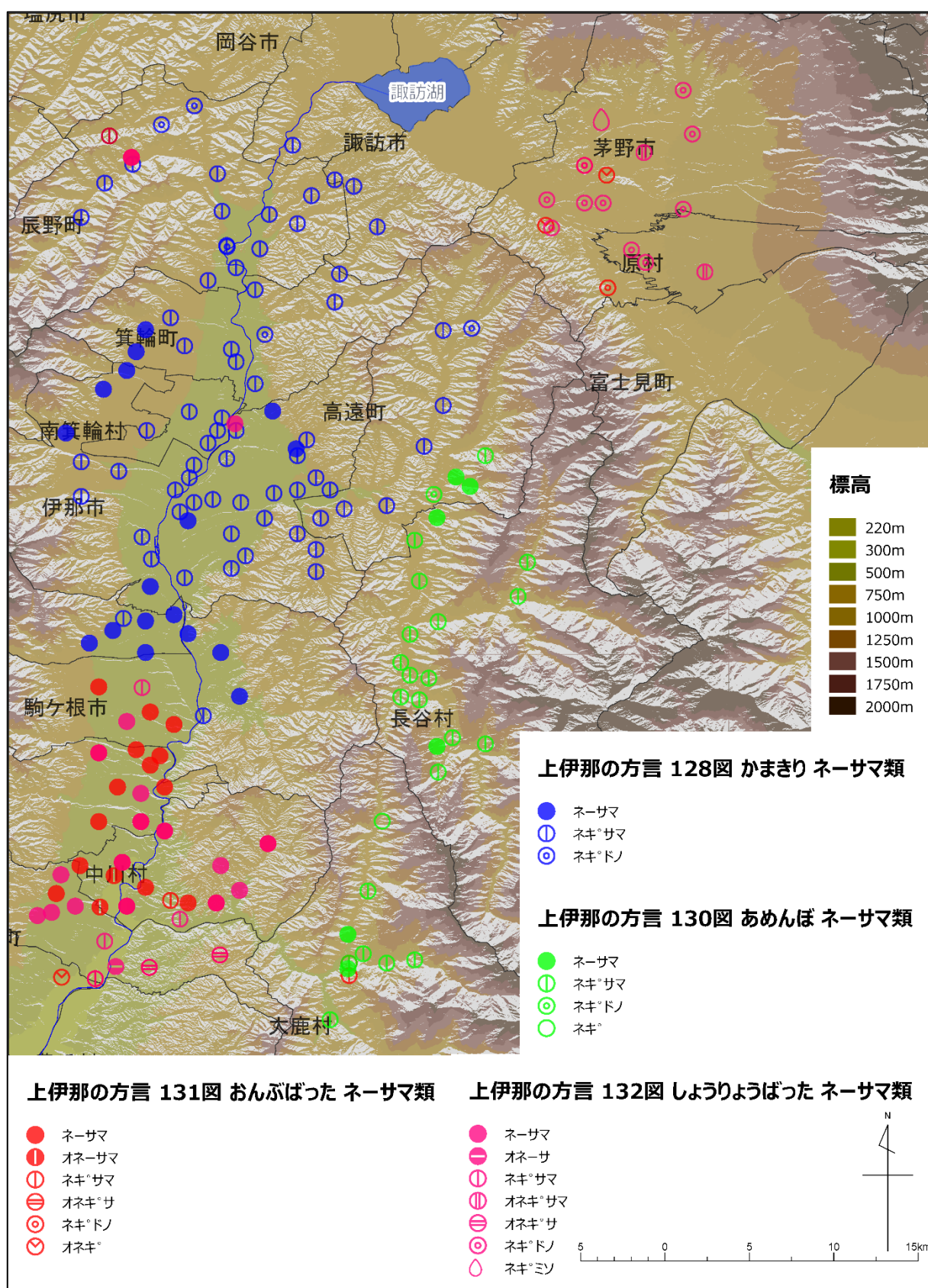
青色の「かまきり」のネーサマ類は、伊那市を中心とした上伊那地方に分布している。

緑色の「あめんぼの」ネーサマ類は、赤石山脈(南アルプス)と伊那山地に挟まれた赤石構造谷(市川正夫編 2008:186)に沿って分布している。

赤色と紅色の「おんぶばった・しょうりょうばった」は、北東部では八ヶ岳の裾野に広がる高原状の地域、地元では山浦と呼ばれる地域に分布している。また南西部では、伊那谷(伊那盆地)の中でも下伊那ならびにそこに接する上伊那地域(以下、下伊那方面)に分布している。

それぞれの分布域は、高山によって隔てられ区分された人々の生活圏であり、かつ共同体である盆地に対応しており、小盆地宇宙(米山俊直 1989)を明瞭に体现している。

同音衝突をはじめとする語彙の方言分布は、言語変化の反映であることは確かであるが、言語の歴史のみで決定されるものではなく、言語を使う人々の暮らしから切り離して考えることはできないことをこの分布は物語っている。



【図6】 「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった・しょうりょうばった」のネーサマ類と地域

「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった・しょうりょうばった」の3種の虫が示すネーサマ類による見事な同音衝突は、『上伊那の方言』のための調査が実施された1960年代末の状態であった。それから半世紀以上を経た現在はどうなっているだろうか。

伊那諏訪(2010s) 41図 神主 ネーサマ類

- ネーサマ
- ネギサマ・ネギサン
- ⊙ ネギドノ
- ⊗ ネギ

伊那諏訪(2010s) 104図 かまきり ネーサマ類

- ネーサマ

伊那諏訪(2010s) あめんぼ ネーサマ類

-

伊那諏訪(2010s) 107図 おんぶばった ネーサマ類

- ネーサマ
- ⊙ オネーサマ・オネーサン
- ⊗ ネギサマ
- ⊙ オネギサマ
- ⊙ ネギドノ

伊那諏訪(2010s) 108図 しょうりょうばった ネーサマ類

- ネーサマ
- ⊙ ネギサマ
- ⊙ ネギドノ
- ◆ ネギリムシ

5 0 5 10 15km

10

図4・5・6に示した1960年代と較べると半世紀で大きく変化したことがわかる。

まず、虫の名称から行くと、「かまきり」と「あめんぼ」のネーサマ類は大幅に衰退した。それぞれ1～2地点にしか見られない。

次に「神主」のネーサマ類であるが、こちらも衰退が著しい。諏訪地方の山浦地域や下伊那方面の分布が消えている。

その一方で、上伊那地方や赤石構造谷では今も「神主」はネーサマ類であり、山浦地域や下伊那方面では今も「おんぶばった・しょうりょうばった」はネーサマ類である。

整理すると表のようになる。

【表】 ネーサマ類の半世紀（○：残存、×：衰退）

	神主	虫
上伊那地方	○	×かまきり ¹⁰
赤石構造谷	○	×あめんぼ ¹¹
山浦地域	×	○おんぶばった・しょうりょうばった
下伊那方面	×	○おんぶなった・しょうりょうばった

この表からも理解されるように図7が示す21世紀のネーサマ類は、「神主」と「おんぶばった・しょうりょうばった」の同音衝突に変化したのである。すなわち、半世紀を経て、虫どうしの同音衝突から、人と虫の同音衝突へという言語変化が起こったことになる。

11. むすび

既存でかつ公表されている言語地図を見直すことにより、長野県伊那・諏訪地方における「神主」をもとにするネーサマ類が表す3語（「かまきり」「あめんぼ」「おんぶばった・しょうりょうばった」）による同音衝突を地図で検証し（図4・図5）、それぞれの領域が小地域区分に対応することを捉え（図6）、さらにその後の半世紀を経てネーサマ類は虫どうしから虫と人（「おんぶばった・しょうりょうばった」「神主」）の同音衝突に変化したこと（図7）を明らかにした。

ところで、ここで得られた分布領域と地域との一致や同音衝突の変貌という事実は、伝播に伴い同音異義語の領域がにらみ合いになるという同音衝突に関する従来の知見と必ずしも噛み合っていない。その点で、同音衝突そのものに対する再考——同音衝突はどのようにして生じるのか、そもそも同音衝突とは何なのか——を要求するものである。

フィールドワークに制約がある状況下において、既存のデータを見直すということを念

¹⁰ 「かまきり」は多くの地域で標準語化によりカマキリが使われるようになっている。

¹¹ 「あめんぼ」は興味深いことに多くの地域でミズスマシに変化しており、いわゆる地方共通語や気づかない方言として用いられているようである。

頭に置きながら、どのようなことができるのかという事例を提示した。不可抗力なできごとで、やりたいことが計画通り進められないというのは、なんとも歯がゆい。そういうときだからこそ、データを見直したり、目先を変えてみたりというのもひとつの選択肢だろう。選んだ小路に入ってみて、違うなと思えば、また戻れば良い。一方、おもしろいと思ったら、時機を確認しながら、地図の場所を実際に訪ねてみたい。そして、景色や音や匂いを感じてほしい。可能なら触れたいものだ、人々の暮らし、もちろん、ことばにも。

文献

- 市川正夫編『やさしい長野県の教科書 地理』, 長野: しなのき書房.
- 大西拓一郎 (2016)『長野県伊那諏訪地方言語地図』, 私家版.
- 小林隆 (1981)「同音衝突の意味的側面: 高田西部言語地図を中心に」『国語学』126, 1-12.
- 小林好日 (1950)『方言語彙学的研究』, 東京: 岩波書店.
- 柴田武 (1969)『言語地理学の方法』, 東京: 筑摩書房.
- ジリエロン, J. (1994-1995)「ALF による疑似ラテン語*CLAVELLUS「釘」の方言分布と
同音衝突(1)~(3)」(大川泰子・W.A. グロータース・佐々木英樹訳)『日本方言研究会
第 58 回研究発表会発表原稿集』82-107, 『日本方言研究会第 59 回研究発表会発表原稿
集』65-84, 『日本方言研究会第 60 回研究発表会発表原稿集』71-84.
- ドーザ (1938)『言語地理学』(松原秀治訳), 東京: 富山房.
- ドーザ (1958)『フランス言語地理学』(松原秀治・横山紀伊子訳), 東京: 大学書林.
- 馬瀬良雄 (1969)「言語地理学—歴史・学説・調査法—」『国文学 解釈と鑑賞』34(8), 189-
220. (平井昌夫・徳川宗賢編 (1969)『方言研究のすべて』189-220, 東京: 至文堂. に同
じ。馬瀬良雄 (1992: 13-53) に再録。)
- 馬瀬良雄 (1979)「同音衝突—相補分布との関連で—」『国語学』119, 41-56. (馬瀬良雄 (1992:
55-77) に再録。)
- 馬瀬良雄 (1980a)『上伊那の方言』, 伊那: 上伊那誌刊行会.
- 馬瀬良雄 (1980b)「神主の方言をめぐる虫たち」佐藤茂教授退官記念論集刊行会編『佐藤
茂教授退官記念 論集国語学』611-629, 東京: 桜楓社. (馬瀬良雄 (1992: 95-112) に再
録。)
- 馬瀬良雄 (1992)『言語地理学研究』, 東京: 桜楓社.
- 米山俊直 (1989)『小盆地宇宙と日本文化』, 東京: 岩波書店.
- 柳田国男 (1930)『蝸牛考』, 東京: 刀江書院.
- Onishi, Takuichiro (2010) Mapping the Japanese language. *Language and Space: An
International Handbook of Linguistic Variation: Language Mapping*. 333-354, Berlin:
Mouton De Gruyter.
- Onishi, Takuichiro (2018) Dialects of Japanese. *The Handbook of Dialectology*. 559-570,
Hoboken: Wiley-Blackwell.

(原稿提出日 2020 年 9 月 10 日)